



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	家庭科における「家族」の教育
Author(s)	富士栄, 登美子
Citation	科学技術教育研究紀要(3): 45-52
Issue Date	1993-03
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2231
Rights	

家庭科における「家族」の教育

富士栄 登美子

【要旨】 私たちが目指している幸福は、地球に住む全ての人たちと同じである。そして、それは家族が単位なのである。“家族とは何か”この基本的で重要な課題に取り組みながら、そのプロセスの中で、人間が生きていく上での大切なものを具体的に生徒たちに理解させたいと考えた。家族と家庭生活にかかわる領域の授業の中で、生徒の関心を高めるための教材として、落語、映画、新聞などを使って現代の家族の問題を探ろうとした。

【キーワード】 家族関係、親子関係、夫婦関係、離婚率、出生率、未婚化現象、育児休業

I はじめに

平成5年度より実施される中学校技術・家庭科の「家庭生活」領域で取り扱われる家族について、どのような教材で何を教えたらいいのか担当者の多くが悩んでいる。高校家庭科では、これまでも家庭経営の分野で家族については取り扱われてきたが、現代の家庭の変容の中で、家族の問題に直面しなければならない状況にある。

「家族の時代」といわれる今日、これまでの家族の概念に当てはまらない家族が多くなり、家族の在り様がさまざまになってきて、家族とはこういうものであると生徒たちに教えることができにくくなってしまった。だからこそ悩むのであり、家族について考えさせる必要性が大きいように思う。しかし実際には、生徒たちは、家族や家庭生活への関心を引き起こされることがないためか、家族の生活を見つめようとする生徒は少ない。

「意欲、関心、態度」を育てる新しい学力観を念頭に入れながら、これまであった既存の知識を生徒たちに教えるのではなく、現代の家族の様相を直視し、家族とは一体何なのだろうかと改めて思い返し、これからの新しい家族像を生徒たちに考えさせることのできる授業を展開していかなければならない。ハウスがあってもホームがない、テーブルがあっ

てもいわゆる食卓がない、そのような家庭を見つめ直すことのできる力をつけたいと考える。

社会の変化にともなって変貌する家族に対応するかたちで、新学習指導要領においても、小・中・高校を通して家族と家庭生活にかかわる領域の一層の充実が図られている。

家族を取り上げた文学作品は数限りなく多い。本稿で教材化を試みたのは、一つの落語と一つの映画である。古典的な家族関係としての落語と、現代の家族の問題を考えさせる意味で現代の映画を取り上げた。

生徒に次の授業が待ちどろしいと感じさせるような教材の研究が必要である。落語や文学作品の中に扱われている例を引き合いに出しながら、楽しく生徒の興味を引き出すようなもので、しかも考えさせることのできるものを選ばなければならない。

II 落語を教材にして親子関係を語る

家族の問題は本来、個人的要素のきわめて強いものである。家族を語る時、最も身近なことがらであるだけに、とすると生徒のプライベートな領域に触れがちになるが、それは絶対にあってはならないことであり、配慮すべき点である。家族・家庭生活の問題は、客観的にみて、「家庭生活をめぐる社会の中の家族」とのとらえ方をすれば、決して

個々の問題ではないのだが、教材の選択には配慮を要する。

古典落語の中には、親と子を題材にしたものが多くある。「真田小僧」「片棒」「親子酒」「藪入り」「初天神」「桃太郎」「子別れ」などいくつかあげられる。これらの中でも中学生に教える教材として取りあげられるのは、「初天神」であろう。もともと落語は、深い示唆を与え考えさせるという類のものではない。授業の導入時に、生徒にインパクトを与えるものとして適していると思われる。

<すじがき>

新しい羽織を着て初天神に出かけようとした熊さんが、息子の金坊に見つかってしまい、仕方なしに連れて行く。縁日に来ると、金坊と家を出るとき約束したのに、あれ買え、これ買えとせがまれ、仕方なく飴や団子を買わされる。「だから、連れてくるんじゃないか」と後悔していると、今度は凧屋があった。また金坊にせがまれ、凧上げを始める。夢中になっていると、金坊が酔っぱらいにぶつかってしまふ。「どうもすみません。何分にも子どものことでございます。ご勘弁願います。泣く奴があるか、金坊、俺がついてらイ。」今度は、熊がぶつかふ。「どうもすみません。何分にも大人のしたことでございます。どうぞご勘弁願います。チャン、しっかりしろいッ、俺がついてら。」金坊に買ったはずの凧を熊が夢中になって、金坊はなかなかさせてもらえない。「こんなことなら、親父なんか連れてくるんじゃないか。」と落が入る。

縁日での子のおねだりは、昔からよくある。諦めながらも、「金坊、俺がついてらイ。」で、親の子を支持する気持ちがよく表わされている。「チャン、俺がついてら。」に思わず笑ってしまうおかしさがあり、親と子の間の価値観の成立を感じさせてくれる。

[親と子の関係]

1 価値観

親に、先生や友だちとちがう、世間とはちがう価値観があって、世間の人がどう言おうと別の価値観で子どもを支持してくれる親がいるということは大きな支えになる。このことは、その子の持っている良いところを評価できることを指している。親が世間の価値観の接点になっていると子どもにとっては非常に辛い。世間とは少しちがう価値観が親にあれば、子どもは救われるにちがいない。子どもへの絶対的な価値観である。

2 コミュニケーション

よく言われるコミュニケーションを持つということは、人間特有の行為であって、話すことと聞くことの簡単な行為のことである。お互いに話したり、聞いたりしながら何を思っているのかを知ることが大変重要になる。ある中学校の校長先生は、校内のゴミを拾いながら、「親と対話しているかね」と生徒たちに話しかけていた。親と対話して欲しいと願う校長先生の暖かさを感じた。確かに、中学生になると親と話さなくなると言われる。これは、親が聞き出そうとして話を聞こうとしないから、文句を言われるのがいやだからなどが考えられる。また、この時期の特徴として、何ごとにも面倒がる現象がみられるが、友だちとはよく話すのに、親と話すがなぜ面倒なのだろうか。子どもには子どもの世界ができつつあり、言葉では伝えきれないところがある。誤解されたくないし、口を出されたくない気持ちもある。ここで、思い出さなければならないことは、子が幼少の頃一生懸命話しているのに親は聞いていただろうかということである。

言葉を使わない交流にもコミュニケーションがあるとする考え方があるが、これは、動物にも見られる眼差し、音声などの行為である。たとえば、親子が衝突して怒りを表す行

動も一種の行為ではあるが、コミュニケーションとは言い難い。つまり、たとえ衝突するにしても、コミュニケーションが成立するためには、そこに言葉あるいは文字が介在し、話すことと聞くことの二方向の流れが生じる必要がある。さらに、ここにおいて大切なことは、言葉を大切にすることと相手の価値観を無視してはならないことである。

家族の中にも、会話がなくてそれぞれの部屋でテレビを見ている例が多くなってきている。会話を大切に、それを楽しんでいる人たちからすれば考えられないことであろう。会話のない食事、一人で食べる食事、私の言ういわゆる「テーブルがあっても食卓がない」とは、このことを指している。

これだけ物質が豊かな時代になったにもかかわらず、心の豊かさは貧困になり、それぞれがコミュニケーションをもつことが出来ずに苦しむ親子が数多くいる。また、大人も子どもも時間に追われ、何でもないおしゃべりを一番身近な家族とさえできない子どもたちがいることも忘れてはならない。

3 子どもが親に求めるもの

子どもが父親に求めるものと母親に求めるものは、おのずと違うものがあることに気づかなければならない。

子どもはいま何を求めているのかを知ろうとすることが大事なことである。教育も同じである。生徒たちが何を教えてもらいたがっているのか、言い換えれば生徒の心を本当につかむことが大切なのである。生徒を知っていなければ私がここで例に出した教材が適しているかどうかはわからない。

親としての評価と一人の人間としての評価とは違う。中学時代は、まだ親としての評価をしているであろう。子どもが成長すると、親としての評価から一人の人間としての評価に変わる。そうなったときはじめて親としての立場にも思いがいくようになる。つまり、

自立したときに共生が可能になるのである。

4 親と子どもの関係歴

『子どもが生まれてはじめて親になったのだから、親としての年齢は子どもと同じである。』*つまり、第一子が18歳であれば、その子との親子歴は18年であり、第二子が14歳であれば、その子との親子歴は14年なのである。「負いたる子に教えられる」のように、育児は‘育自’なのであり、共に育ち合うということはこういうことなのかもしれない。このことをよく知っていないと、世間の価値観に振り回されてしまう親になりかねない。

子どもに対する親としての責任は、子どもが成人するまでとするのが一般的であるが、親と子の関係は、成人までではない。

III 映画「クレイマー・クレイマー」を教材に父子関係、夫婦関係を語る

この映画をはじめて見たとき即座に教材化したと考えた。単に生徒たちに映画を見せ、感想を書かせるだけでは教材化したことにはならない。家族・家庭生活の問題を個々の問題と捉えるのではなく、現代の問題として客観的に学ばせ、これからの家庭生活をどうつくっていくかを考える授業にしたいと思う。

<あらすじ>

テッドはニューヨークに住むサラリーマンであるが、さながら日本の企業戦士を思わせるような仕事人間で妻ジョウアナとの間には会話らしい会話はない。ある日、テッドが命をかけてきた契約を成立させ深夜帰宅するのだが、ジョウアナは家を出る決心をしていた。彼女の不満が理解できない夫と7才の息子ビリーを残して家を出た。翌朝、「ママはどこ？」と聞くビリー。今までしたこともない朝食の支度、フライパンの場所さえわからないテッドはフレンチトーストをつくることもできない。学校へ息子を送るテッドは息子の学年も

知らなかった。「なにすぐに帰って来るさ」と思っていたテッド。しばらくして息子のビリー宛に手紙がくる。My Dear Birry から始まるその手紙には次のように書かれていた。“ママは家を出ました。たまにはパパが家を出て、ママが子どもを育てます。ときには、ママが家を出てパパが育てることもあります。ママはすてきなことを見つけに家を出ました。誰もが望むことです。今のママにはしたいことがいくつかあるから家を出ました。話す機会がなかったので、この手紙を書きました。ママはいつまでもあなたを愛しています。一緒に暮らせなくても心のママです。これからママは一人で生きていきます。”テッドはこの手紙のあとジョウアナと分かれる決心をする。ビリーは親戚に預けた方がいいという上司の忠告はきかず、テッドは息子のビリーと一緒に暮らす。しかし、仕事にも支障をきたし、とうとうクビになってしまう。失業してしまったテッドだが、息子との間にはかつてなかった強い絆と父親としての愛情が生まれていた。

一方、仕事に就き生活も安定したジョウアナはビリーの親権を巡って裁判をおこす。テッドは必死で仕事を見つけたが、結局ビリーはジョウアナの手に渡ることになる。この裁判で、ジョウアナはテッドのビリーへの愛情を感じると共に、テッドの驚くほどの変わり様に目を見張るのであった。1年以上ビリーと二人で暮らしたテッドは、もはや息子なしでは暮らせない。裁判に負けたテッドのところへビリーを引き取りに来たジョウアナであったが、父と息子の深い愛情に胸を打たれ、ビリーの家はこしかなないとテッドに託し、はじめて夫婦の心が通じ合えたところで映画は終わる。

〔夫と妻の関係〕

1 父性愛

ジョウアナは、誰の従属者でもない独立し

た自分になるためには離婚以外の手段を選べなかった。そして母性愛は捨てきれず、かつ共に生活しながらテッドに父性愛を目覚めさせることができなかったのである。このことは、日本の企業戦士の妻たちによく似たところがある。

仕事だけに打ち込み、家事はもちろん、自分の身の回りのことさえ処理できず、息子との関係も希薄になっていた男がやがて仕事と家庭を両立させ、男として父親として一人前になっていく、このストーリーのように、男にも女にも仕事と家庭を両立させ、父親として母親として一人前になっていくことがいま迫られているのではないだろうか。

家族との関わりあいがいまいかずに孤立している父親が増えてきているのである。

2 離婚率増加と出生率低下

(1) 中・高齢層に増えている妻からの離婚願望

厚生省の「人口動態統計」(92年)によると、離婚数の全体の内訳は30代が36%、40代が28%、20代が24%を占め、50代以上は12%に過ぎない。しかし、結婚20年以上の夫婦の離婚は、70年の5%が90年には14%(約3倍)へと年々増えているのである。そして、厚生省の人口動態統計年間推計によれば92年の離婚件数は、これまで最多だった83年にはほぼ同じであることがわかる。

<30代の妻の例> 離婚の理由にはっきりとしたこれというものがない。お互いのコミュニケーションも悪いけれど、それだけでない。自分が一生懸命大変な思いをしているのに夫は何等わかってくれない。髪ふりみだして困っているのに夫は仕事に逃げてしまう。うっ積した気持ちが子育て中の主婦の胸の中いっばいにふくらんでいる。

<40代の妻の例> 企業戦士だった夫に潜在母子家庭を強いられてきた。くたくたになって帰ってきた夫に家事をしてとは言えなかつ

た。『定年退職になるまでは結婚を続けるが、定年になったら退職金の半分をもらって離婚したい。そしてその後は二度目の独身生活を楽しまたい。亭主は退職すると妻にもたれかかってくる。今まで仕事だ、会社だと放ったらかしていたくせに。

<50代の妻の例> 夫の定年はすなわち妻の退職なのである。妻「わたくしは40年間、6時になると必ず主人の靴音が門から玄関にするのを聴いて、人生をすごしました。でももう、あの靴音をきまった時間にきくのが耐えられなくなったんです。」、夫「わたしの、何処が不満なのだ。」、妻「それがおわかりにならないから、イヤなんです。」^{*2}

これらの例をみて、夫婦の間には会話が成り立っていなかったのではないかと分析される。さらに女の身勝手だとまで言われるのである。そう言われるのがわかっていながら、また口に出すとうまくいかないわかっていたから妻たちは口を閉じてきた。30代の例からは、子どもを夫と共に一緒に育てていると実感したい。40代、50代の例からは、せめて自分のことは自分でして欲しい、私（妻）の人生は何だったんだろう。何のための人生なのか、と叫ぶ声が私には聞こえてくるのである。家事・育児に妻以外の家族が参加するのは当然であろう。これまでの伝統的な役割分担意識はゆれ動いている。しかし、ゆれているのが片方の側だけのときに事がおきるのである。依然として、男は仕事、女は家庭の図式が残っているときである。

当センターの家庭科、技術・家庭科教材研究の講座に出席の中学校、高等学校の家庭科教員を対象に行ったアンケートの結果を次に示す。

「あなたは、今の配偶者と離婚したいと思っただけですか。」

はい15人 いいえ33人 未婚21人

既婚者の1/3の人は離婚したいと思っただけのことになる。年代別にみると、

20代2人 30代7人 40代3人 50代3人

未婚者の中には「離婚が可能な人と結婚したい」との意見が一人(20代)あった。制度に縛られない結婚をしたいという意味でこの様に答えていた。離婚をしようと思った理由は聞かず、年代だけにとどめた。

さらに、「子産み、子育てと仕事の両方を続けるために必要な条件は何でしょうか。」の質問に対しては、夫や家族の家事への協力をあげる人が多い。(総務庁の調査資料によると、共働き夫婦の家事時間は、妻が3時間31分に対し、夫は8分なのである。)

次いで、育児休暇制度の確立と休暇を取りやすい職場の雰囲気あげ、さらには保育所などの福祉施設の充実をあげている。

●赤ちゃんが生まれたら、育児分担のため夫はしばらく仕事を…

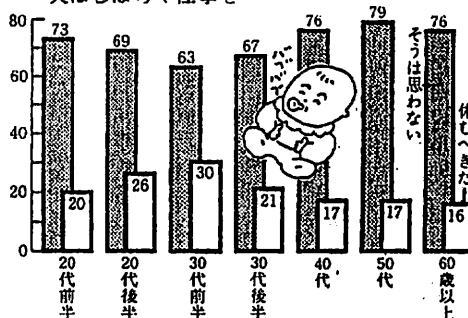


図1 92.1.1付け朝日新聞、同社による調査

(2) 出生率低下

世界人口が倍増し、2050年には100億人との見通しを国連白書は出している。環境問題としては、人口増加の危機が叫ばれている一方で、日本では出生率の低下が社会問題となっている。1989年では、合計特殊出生率（一人の女性が一生の間に産む平均の子ども数を表す数値）が1.57(単位はつけないで表示する)となり、1.57ショックで有名になった。さらに翌年90年には1.54に、そして現在は1.53からさらに減少すると推計されている。

わが国の総人口に占める子どもの比率は92年4月1日現在で17.4%と総務庁統計局が発表した。世界の中でも、ドイツ(15.6%)、イタ

妻35～39歳の出産の希望と実際

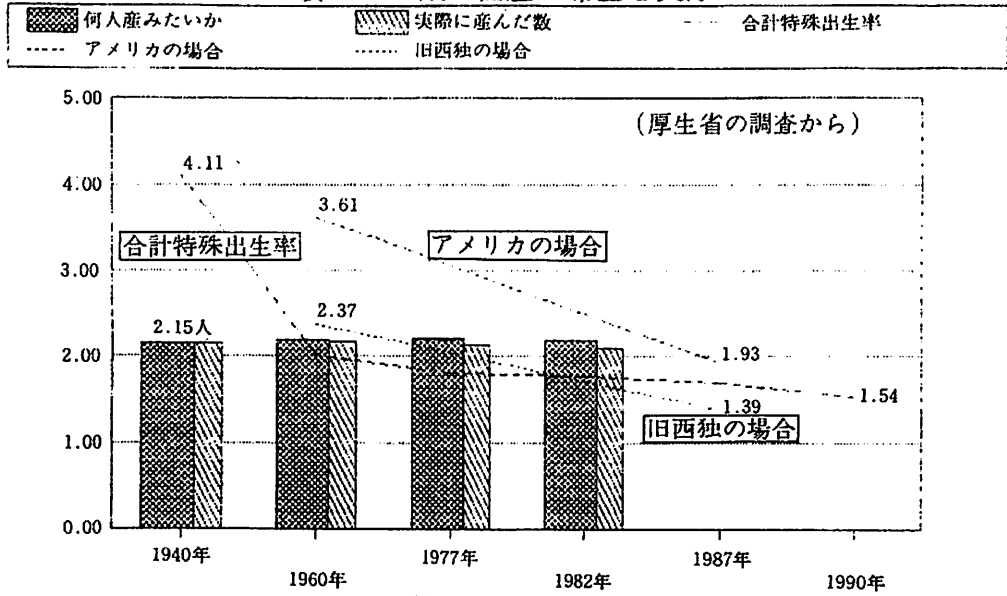


図2 合計特殊出生率、出産の希望と実際

リア(16.7%)に次いで低い水準となっている。

出生率低下をもたらしたのは、平均初婚年齢の上昇、シングル志向、DINKS（ディンクス double income no kids）家族の出現、狭い住宅事情などといわれているが、前出の30代の妻たちの声にあるようなうっ積した気持ちが出生率低下をもたらしている要因は大きいのではないだろうか。

年齢別にみる男女の未婚率の推移

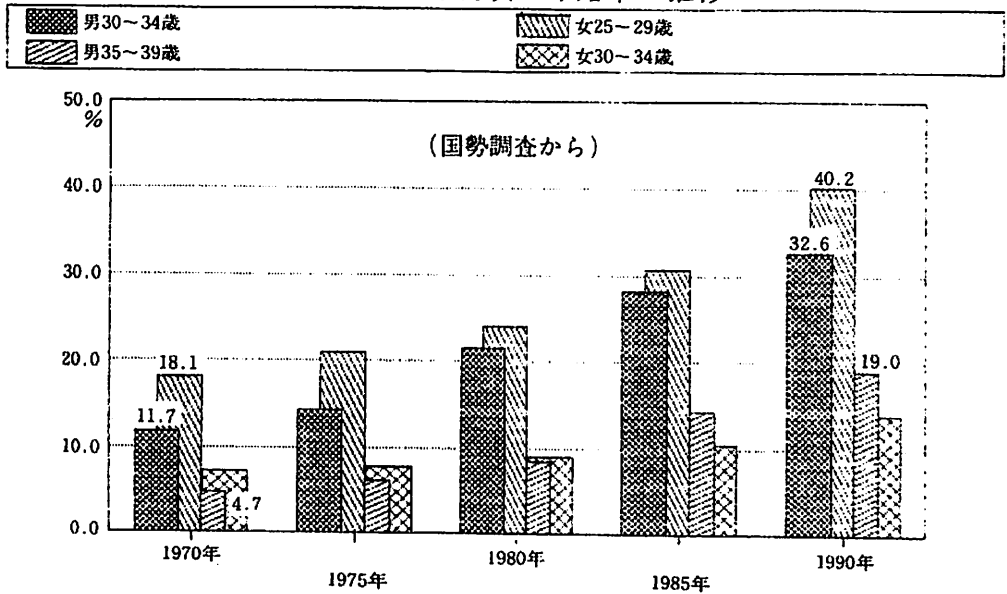


図3 広がる未婚化現象

つまり、離婚願望の上昇と出生率低下は決して無縁のものではないのである。

(3) 未婚化現象

さらに、離婚率の上昇は未婚化現象にもつながっているといえる。『国勢調査によると70年までは、20代後半の男女の未婚率は、男性が40%台半ば、女性が20%弱であり変化はなかった。それが75年以降の15年間で、未婚率が上がってきた。とくに20代後半の女性は、75年には約20%だったのが90年には約40%と倍になった。30代前半の女性の未婚率も約8%から約14%と倍近くになっている。』*
*結婚の形態が、家族の在り方が明らかに変貌しているのである。先のアンケートの女性の声にあった「離婚可能な人と結婚したい」がよく物語っているといえよう。個人単位の社会を求め、未婚で子供を産むことも考えられる社会の変化がみえてくる。

IV これからの家族のとらえ方

60年代中頃の「マイホーム主義」から70年代中頃の「ニューファミリー」へ、そして現代「ポスト・ニューファミリー」と呼ぶ家族パターンは次のようである。

共働き家族、母子家族、父子家族、継父母家族、子を持たない家族、同棲、別居夫婦家族、修正大家族(同居はしないが、緊密な関係をもっている親家族と子家族)、夫婦別性家族、疑似的家族集団(異性や同棲の者たちが居心地のよさや気が休まるなどの人間関係を基盤につくる家族)などの家族、または家族的集団である。

家族は共同生活者であり、それ以上のことを求めるものではないとする考え方があがる。家計も別々とする‘個計’の家族の出現もある。すなわち、これまでは、家族とは血縁関係にある者の集団であったのが、血縁関係にない者でも一緒に生活する共同生活者であれば、これも家族と呼ぶのである。しかし、人は困難に向かい合うときがある。そのとき、

支えとなるのが家族である。仕事に疲れ、育児に疲れ、子育てに疲れ、介護に疲れたときに支えとなるのが夫であり、妻であり、家族なのである。

夫婦平等を目指し、対等の生活を願う新しい夫婦関係を育む家族が生まれている。しかし、「男は仕事、女は家事・育児」という役割分担が社会的合意として根づいていた日本の社会にはそうした家族のモデルがない。そのために現代の夫婦は模索しつつ、悩み続けているのだ。しかし、たとえモデルがあったとしてもそれを真似ようとはしないであろう。それが現代の家族の特徴なのである。

家庭そのものの意味が流動化している現実を直視して、93年度から94年の国際家族年にかけて文部省は、少子社会の対応を探るために6カ国を対象に家庭教育の国際調査を行おうとしている。

92年秋に訪問したドイツで、ハイデルベルグに住んでいる方の話によれば、育児手当が第1子は月額50マルク(¥4,400)、第2子は70マルク(¥6,160)、第3子は120マルク(¥9,760)、第4子は240マルク(¥19,520)であることを聞いて、その高額に驚いた。幼稚園から大学を終了するまでの学費は一切無料であること、教員の育児休暇も3年も取れることなどをうかがい、制度としては対応している社会でありながら、なぜ世界で最も低い少子社会なのだろうか。文部省の調査結果に期待したい。

子どもを育てながら働いている女性の意識は日本とアメリカでどう違うのか。三和銀行ホームコンサルタントが、東京とニューヨークで実施した調査報告について、日米の家族観の違いは無視できないと長野県短期大学の杉本貴代栄教授が分析している。『家族と言う場合、日本では子どもや、時には自分や夫の両親まで含めているのに対し、アメリカ人は夫婦を考える。そして、日本人はその家族は半永久的だと思っているが、アメリカ人にとっては「努力しないと壊れるかもしれない」

存在。だからこそ、家族とのコミュニケーションに時間を使わなくてはならないと考える傾向がある。さらに、家族がいつ壊れるかわからないだけに、女性の経済的自立も重要になる。』^{*4}これまでの日本の家族、家庭は壊れるはずのないものであった。しかし、性別役割分業の意識が強く、家事、育児を完璧にこなさなければ仕事に出れなかった日本の女性はいま変わろうとしている。壊れるかもしれないという危機観はなるほど大切なかもしれない。

V おわりに

かつての企業戦士だった夫を家庭に返そうとしている企業、男も取る育児休業制度、夫の家事、育児分担意識、それに伴う父性愛の復活、真の豊かさの再考などを思えば、新しいDEWKS(デュークス double employed with kids)の出現も可能である。かつては、ゆとりのある生活を楽しむために意識的に子どもをつくらないDINKSであったが、子どもを持ち共に働き、子どもは大きな喜びを与えてくれるかけがえのないものであることを知り、仕事を持ち生活を楽しむことと、育児を両立させることができると考える夫婦である。

21世紀の家族像は、今の台所に夫の身長に合わせた流しと調理台が加わり、夫婦それぞれが得意とする料理を会話をしながら調理し、一つのテーブルに並べられ、そこに対話のある食卓が生まれるようになりたい。そのためには、夫も家事、育児に積極的に参画することが前提とされる。これからの時代の家庭を創造していく生徒たちへ提言したいと思う。家族を取り扱うとき、授業者の家族観がどうしても入ってしまうのは仕方のないことであり、むしろ、授業者の人生観や生き方が問われる授業になると思う。

人は生まれ育ち、やがて老いを迎える。育児と介護の中核をなすのは、やはり、家族であり、家庭である。共に働く家庭が半数をこ

えるようになった今日、育児や介護休業の制度化は欠かせないものとなってきた。しかし、このことは制度だけではなく、男も女も仕事と育児や介護とを両立させることのできる仕組みを確立することがいま求められている。

男もとれる育児休業法が92年4月から施行された。実際に育児休業を体験した東京都渋谷区役所職員の富永誠治さんは、『育児はたいへんだけど、すごく楽しい。男はこれまで、こんなに楽しいことをする権利を奪われてきたのだと思う。男の育児休業法は、「育児というすごくたいへんな仕事を押し付けられる」のではなく、「楽しいから男も」と考えた方がいいと思う。』^{*5}富永さんのような「宝くじにあたったみたいなんだんさん」が増え、それを受け入れることが社会の常識になったとき、出生率は上昇し、未婚化現象は減少するであろう。

まずは、夫の育児参加を提案する。そして妻は一步退く形で、父と子の空間を安心してながめていられるゆとりが必要なのである。

家事はボランティアに似ている。家事をしていくらになるとは思わない。義務的にするのもない。誰かのために何かできることはないか、何かしていることに喜びを感じる。そして、そこには思いやりと感謝の心が芽生える。これからの生徒たちには、男女の別なくボランティア感覚を育てたいと思う。家事がボランティアと違うことがひとつある。それは、相手が家族であるということである。

“家族とは”を追求しつつ、ほんとうの豊かさを、真の幸福を目指したいと願っている。

家庭の在り方、とりわけ家族の在り方が仲間との在り方、かかわり方を教える原点になっていることをもう一度思い出したい。

参考資料

- ^{*1}藤田富美恵(1989)「父の背中」潮出版
- ^{*2}朝日新聞91.11.24万華鏡 遺藤周作
- ^{*3}朝日新聞92.6.17広がる「未婚化現象」
- ^{*4}朝日新聞92.2.27働く女性の意識調査
- ^{*5}朝日新聞92.2.20育児休業 男性も当事者
朝日新聞90.10.22, 92.2.27, 92.4.30,
92.5.5, 92.6.17, 93.1.5の各朝刊